CSR REPORT 2017

関西テレビ放送 2016年度CSR報告書

8カンテレ

目次

1　ごあいさつ
2　本冊子について
3　会社概要・関係会社・視聴可能エリア

コンテンツメーカーとしてのカンテレ

6　制作番組（制作局）
8　報道番組（報道局）
9　スポーツ番組（スポーツ局）
10　事業活動（事業局）
11　コンテンツビジネス（コンテンツビジネス局）
12　2016年度受賞一覧

カンテレのメディアリテラシー推進活動

16　出前授業
19　映像制作「学びアイ」
21　オープンスクール@カンテレ
23　社内組織「心でつながるプロジェクト」について

カンテレのCSR推進活動

26　人権への取り組み
26　- 募金活動
30　- 子どもたちのために
32　-「ソーシャル・パフォーマンス」シリーズ
34　地域コミュニティーへの参画・環境への取り組み
37　自己検証番組『カンテレ通信』

ごあいさつ

情報を通じて人と人をつなぐ「メディア」という巨大な装置が、その変化をやめることはありません。
2016年度以降を振り返っても、トランプ米政権の誕生前後から現在に続く世界の動きにメディアがこれまでにない形で影響力を及ぼしているのはご承知の通りです。

カンテレでも大きな変革の一年となりました。
20年にわたり放送してきた月曜の『SMAP×SMAP』が2万件近くもの反響を頂戴しながら歴史を終え、続いてイメージ調査バラエティー『もしかしてズレてる？』を早速スタートさせました。
看板枠のひとつである火曜の全国ネットドラマも10月からよる9時台というさらにご覧いただきやすい時間帯に移行しましたが、その後もこの枠では『嘘の戦争』『CRISIS 公安機動捜査隊特捜班』など、各局作品の中でも人気のトップを争うラインナップが続いています。

また報道では夕方のニュース新番組『みんなのニュース ワンダー』がスタート、さらに2017年4月からはその流れを『みんなのニュース 報道ランナー』に引き継ぎ、強化と刷新を行っています。

2016年度もカンテレは報道、制作、スポーツ、技術とあらゆるジャンルで数多くの賞を頂戴しましたが、これらは地元・大阪から国内、そして海外に目を向けた、大変幅広い取り組みとなっています。
変革の時代、私たちが一番大切にすべきなのは、質の高い番組の制作を通じて、豊かな文化をもつ関西の地に根を張った「カンテレらしいコンテンツ」を皆さまにお届けし続けることだと思っています。

このCSRリポートは、そうした放送局としての根幹の使命を果たしながら、カンテレが社会への貢献、文化の振興を目標に取り組んでいる活動についてまとめたものです。
私たちはここでも、放送の本業で培ったノウハウを生かした「カンテレらしいCSR」を目指しています。
ご一読いただき、意見や助言を賜りましたら幸いです。

関西テレビ放送株式会社
代表取締役社長
福井澄郎

本冊子について

カンテレでは番組の放送やイベントの開催など、コンテンツの制作を通じて視聴者の皆さまと広くコミュニケーションしていくことと同時に、メディアリテラシー推進活動やCSR推進活動によってより直接の、皆さまとのいわば「顔の見える関係性」も強めていければと願っています。

メディアが発信する情報の読み解きかたを受け手・送り手として互いに学び、鍛えていく「メディアリテラシー推進活動」をカンテレがスタートさせたのが2007年、続いて2013年にはCSR推進部という専門部署を設け、放送本業と関連させながら社会貢献を進める「CSR推進活動」を開始しました。

視聴者の皆さまとじかに触れ合い、自分たちの仕事の在り方を改めて振り返ることで、エリア・地域でさらに必要とされる放送局となっていきたい――と取り組んでいる活動です。

新しい分野であるこれらの活動は、まだ道半ばです。
「メディアリテラシー」一つをとっても「正しい情報」「社会の役に立つ情報」について送り手はそれをどう捉え、どう選ぶべきなのか、どうお伝えしていくべきなのか――
難しい問いです。そして簡単には出ない答えを、皆さまとの直接の対話・触れ合いを通して探していければと思います。

2016年度のCSR報告書「CSRリポート2017」は、最初に発行した「2014」から数えて4冊目です。
「道半ば」ではありますが、本冊子ならびに「カンテレのCSR」についてぜひご叱責、ご指導を賜りましたら幸いな次第です。

※カンテレのメディアリテラシー、CSR推進活動につきましてはホームページにも詳しく掲載しています。ぜひご覧ください。

カンテレ CSR　検索　www.ktv.jp/csr

※本文中の番組、実施したイベント等は2016年度（2016年4月～2017年3月）のものです。原則として西暦年号は省略しました。

会社概要

名称	関西テレビ放送株式会社
本社	大阪市北区扇町2丁目1番7号
代表者	代表取締役社長 福井澄郎
設立	昭和33年（1958年）2月1日
開局	昭和33年（1958年）11月22日
資本金	5億円
社員数	584名（平成29年4月1日現在）
事業所	支社：東京 東京都中央区銀座5丁目15番8号 時事通信ビル12階 支局：名古屋／海外支局：上海 海外特派員：パリ、ロサンゼルス

関係会社

株式会社関西テレビライフ
株式会社メディアプルポ
株式会社関西テレビハッズ
関西テレビソフトウェア株式会社
株式会社レモンスタジオ
株式会社ウエストワン
株式会社セントラルテレビジョン
株式会社ウエルネスライフ
公益財団法人関西テレビ青少年育成事業団

カンテレ視聴可能エリア

人口：約2181万人※／世帯数：約986万世帯※
送信所：東大阪市（生駒山頂）／サテライト局：72局／ミニサテライト局：70局
※ 2016年版近畿地区テレビエリアインデックスより

コンテンツメーカーとしてのカンテレ

関西に根差した放送局として、エリアから全国、海外も視野に入れた、どこよりも質の高い番組を制作・発信していくこと
数多くのお客さまに楽しんでいただける、あらゆるジャンルのエンターテインメントを企画し、開催していくこと
さらには映画で、動画配信で、ビデオグラムで、皆さまとの地上波を超えた出会いの場をもっともっと増やしていくこと
挑戦と創造を持続し、視聴者の皆さまに愛され、必要としていただけるコンテンツメーカーであり続けることが、カンテレの仕事の根幹です。
2016年度、カンテレがお届けしたコンテンツをご紹介します。

制作番組 制作局

全国ネット番組

まずカンテレ看板枠のひとつ、火曜よるのドラマでは2016年度『僕のヤバイ妻』『ON 異常犯罪捜査官・藤堂比奈子』『メディカルチーム レディ・ダ・ヴィンチの診断』『嘘の戦争』の4作品を制作・放送しました。
長い間10時から放送してきた火曜のドラマシリーズは10月の「レディ・ダ・ヴィンチの診断」以降9時台に移行しましたが、引き続き視聴者の皆さまの好評を頂いており、2017年4月期のアクションエンターテインメント『CRISIS 公安機動捜査隊特捜班』もシーズン屈指のヒット作となるなど健闘を続けています。
バラエティーでは20年間ご愛顧いただいてきた月曜の『SMAP×SMAP』が12月末で終了、かわって芸能人イメージ調査バラエティー『もしかしてズレてる?』が1月に始まりました。
また火曜『有吉弘行のダレトク!?』が10月からよる10時の激戦区に進出、そのあとの11時台には新感覚ドキュメント『#nakedEve』さらに『セブンルール』がスタートするなど、続々とフレッシュな番組をお届けしています。
このほか話題を呼んだアメリカ大統領選、トランプ新大統領の動向を独自の視点でお伝えした日曜よるの『Mr.サンデー』や、2017年4月から10年目に入った土曜あさの『にじいろジーン』など情報・報道系番組も皆さまの期待にお応えすべく、全力で制作に取り組んでいます。

『嘘の戦争』

『メディカルチーム レディ・ダ・ヴィンチの診断』

『もしかしてズレてる?』

ローカル番組

カンテレ・ローカル番組の「顔」といえば、平日あさの『よ〜いドン!』。
こちらも間もなく放送10年目に入りますが、2017年春には内容をさらにリニューアル、帯コーナー・曜日コーナー共に新企画を開始して、ますますパワーアップを図っています。
またテレビの目抜き通り・ゴールデン帯でも火曜の『ちゃちゃ入れマンデー』および金曜の『快傑えみちゃんねる』と2本のローカル番組を放送していますが、これらはいずれも2桁の視聴率を維持し、エリア視聴者の皆さまから高い支持を頂戴しています。
さらに週末の土曜・日曜には『胸いっぱいサミット!』『ウラマヨ!』『モモコのOH! ソレ! み〜よ!』『マルコポロリ!』などおなじみの各番組のほか、10月からは土曜午後に長年お楽しみいただいてきた『さんまのまんま』の後を受けて新感覚のシチュエーショントークバラエティー『おかべろ』がスタート、ラインナップをリフレッシュしました。
ローカルでのドラマ制作も活発です。
2015年度に放送したシリーズ『大阪環状線 ひと駅ごとの愛物語』は第3回「大正駅」が平成28年日本民間放送連盟 連盟賞 番組部門 テレビドラマ番組優秀賞を獲得、2016年度には続いてその「Part 2」合計10話を制作・放送しました。

●

全国ネットもローカルも、キーワードは「カンテレらしい番組の制作」です。私たちは大阪の放送局・カンテレとして、長年お楽しみいただいてきたオリジナリティーはそのままに、新鮮なエネルギーがいっぱいの番組をこれからも皆さまにお届けしてまいります。

『よ〜いドン!』

『おかべろ』

『大阪環状線 ひと駅ごとの愛物語 Part 2』第1回 鶴橋駅「優しい追跡者」

報道番組 報道局

報道局では2016年4月から夕方の番組を『みんなのニュース ワンダー』にリニューアルしました。放送時間もそれまでの約3時間から約2時間に変更、報道番組としての信頼性を高め、より密度の濃い内容を目指して取り組みました。
アメリカのトランプ大統領就任、イギリスのEU離脱など海外で大きなニュースが相次ぐ一方、リオデジャネイロ五輪で日本が過去最多のメダルを獲得したことや、相模原の障害者施設で多数の死傷者が出た事件が起きたこと、参院選の与党大勝や小池東京都知事の誕生など、さまざまなニュースがあった2016年度――『みんなのニュース ワンダー』では時代の変わり目をいち早く、より詳しくお伝えしてきました。
そして2017年4月からは、さらに内容を強化した『みんなのニュース 報道ランナー』がスタート。視聴者の皆さまに信頼いただける、暮らしの「伴走者」としてのニュース番組を目指し、地道な取材と関西ならではの視点で、ニュースを分かりやすくお届けする取り組みを続けています。

『みんなのニュース ワンダー』

『みんなのニュース 報道ランナー』

ドキュメンタリー部門では2016年度も数多くの作品が賞を頂きました。
ザ・ドキュメント『京の摺師～パリに渡った浮世絵』（ABU賞 テレビドキュメンタリー部門 審査員賞）『生きること～認知症の心に寄り添うバリデーション～』（第36回「地方の時代」映像祭2016 放送局部門 選奨）『兄と弟～満州 おもいでの河へ～』（第24回 坂田記念ジャーナリズム賞 国際交流・国際貢献報道部門）のほか、報道局のカメラマンが企画・撮影した『3人のヤマトナデシコ～ただ勝利のためでなく～』が、日本映画撮影監督協会のJSC賞 最優秀撮影賞（関西からの出品作では初の受賞）、アジアテレビ賞最優秀スポーツ番組賞、4K徳島映画祭2016 4K映像賞と複数の賞を獲得し、内外から高く評価されました。

『3人のヤマトナデシコ～ただ勝利のためでなく～』

完全ファイルベース化された報道局NVセンター

またニュース・スポーツ映像の収録・編集・送出・保存を、従来のビデオテープから全てデータで行うファイルベース化が完成し、新システムが稼働を開始しました。
現場の作業効率を大きく向上させ、保存するアーカイブの量も大幅に増やすことのできるこのシステムによって、情報としての映像をより豊かに、かつ迅速にお届けすることが可能になりました。

スポーツ番組 スポーツ局

スポーツ局では、2016年度も多くの分野で番組制作に取り組みました。
まず内外のトップアスリートが覇を競う『第36回大阪国際女子マラソン』は今回、ロンドン世界選手権代表選考レースとして開催されました。レースは重友梨佐選手が混戦を制して5年ぶりの復活優勝を遂げ、世界選手権代表を決定付ける感動のレースを皆さまにお送りしました。
ゴルフでは、アジアナンバーワンを決める「アジアパシフィックオープンゴルフチャンピオンシップ ダイヤモンドカップゴルフ2016」が同大会史上初めて地元大阪・茨木カンツリー倶楽部での開催となりました。国内のトッププロが集結する中、結果はセンセショウ選手（台湾）が混戦を抜け出して優勝。関西屈指の名門コースを舞台に、ツアー最高レベルの難しいセッティングのもと、アジアナンバーワン決定試合としてふさわしい内容をお届けしました。
世界を沸かせたリオデジャネイロ五輪では、凱旋帰国した選手たちを大阪に招き、他番組にない現地取材映像を交えて舞台裏に迫った『イキザマJAPAN 小藪の紙面に載らないリオ激写SP』や、卓球の銅メダリスト・伊藤美誠選手を追ったドキュメンタリー『イキザマJAPAN特別編 15歳のメダリスト 卓球・伊藤美誠 大阪からリオへ これがわたしの生きる道』など、関西ゆかりの選手を中心に、独自の番組制作を行いました。

『イキザマJAPAN』

競馬ではレギュラー番組の『競馬BEAT』『うまンchu♥』に加え、世界最高峰レースの一つであるフランス・凱旋門賞を現地取材した『競馬BEAT スペシャル 夢見たフランスの空に ～麒麟・川島はじめての凱旋門賞 観戦記～』や、前人未到の記録を刻んでなお現役にこだわり続ける名騎手・武豊に迫った『武豊の騎手道 雨上がりもビックリ！「天才」の30年を支えた30のヒミツ』などを制作、カンテレスポーツの伝統分野・競馬の多彩なレース映像も盛り込みながら、皆さまに好評を頂きました。
そのほかプロ野球では、金本知憲新監督率いる新生・阪神タイガースの試合をシーズン中14本中継し、ナイターでは平均12%台という好視聴率を記録することができました。

『アジアパシフィックオープンゴルフチャンピオンシップ ダイヤモンドカップゴルフ2016』

事業活動 事業局

事業局では、展覧会や演劇・ミュージカルからクラシックコンサート、伝統芸能など、さまざまなエンターテインメントを皆さまにお届けしています。

全米屈指の美術館の一つ、デトロイト美術館のコレクションの中から、近代絵画の巨匠たちによる選りすぐりの作品が来日した『デトロイト美術館展 大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち』（7月～9月 大阪市立美術館）に約23万人、恐竜研究の最前線を紹介する『恐竜博2016』（9月～2017年1月 大阪文化館・天保山）には約16万人ものお客さまにお越しいただきました。

このほかにも『ポール・スミス展 HELLO, MY NAME IS PAUL SMITH』（京都国立近代美術館）『ルーヴル美術館特別展「ルーヴルNo.9～漫画、9番目の芸術～」』（グランフロント大阪・イベントラボ）など、多岐にわたる内容の展覧会を行いました。

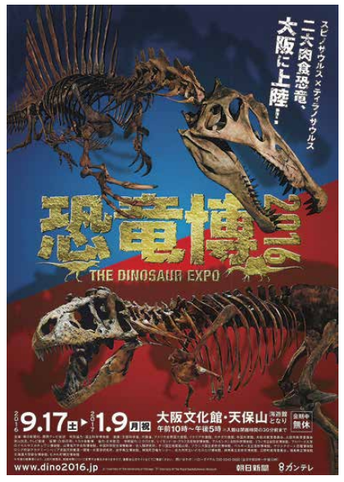
演劇では、東京・兵庫をはじめ全国7都市で開催したオリジナル舞台企画『魔術』のほか、カンテレの社員が演出を務めた『それいゆ』や、オフ・ブロードウェイ作品の日本版制作に挑んだミュージカル『フィフティシェイズ！～クリスチャン・グレイの歪んだ性癖～』など、自主企画の制作に積極的に携わりました。

『恐竜博2016』

また9回目の企画・招聘となるダンスエンターテインメント『バーン・ザ・フロア ニューホライズン』は根強いファンに支えられ、東京・大阪で約2万人の来場者をお迎えしました。

そのほか世界的エンターテインメント集団、シルク・ドゥ・ソレイユの『ダイハツ トーテム大阪公演』（動員 約35万人）をはじめ『1789 ―バスティーユの恋人たち―』『エリザベート』『ジャニーズ・フューチャー・ワールド』『ミス・サイゴン』などの大型ミュージカルや、シリーズ3回目となる『うめだ文楽2017』バレエ公演『エトワール・ガラ2016』のほかクラシックコンサートに至るまで、幅広いジャンルのエンターテインメントを発信しました。

毎年恒例のチャリティーイベント『3000人の吹奏楽』は56回目を迎え、地域文化への貢献にも努めました。



コンテンツビジネス コンテンツビジネス局

まず2016年度の映画製作では、カンテレ社員が監督した織田裕二主演『ボクの妻と結婚してください。』（11月公開・東宝配給）や、阿部寛主演『疾風ロンド』（11月公開・東映配給）をはじめ、4本の作品を幹事社として手掛けました。

次に動画配信ビジネスでは、火曜よる放送のドラマコンテンツが高い支持を頂いています。

SVOD（定額制動画配信）の分野では2016年4月期放送の『僕のヤバイ妻』をNetflixに供給、数多くの皆さまに視聴いただいているほかAmazon Prime Videoでのサービスも新たに始まるなど、大きな飛躍を遂げました。

またTVOD（都度課金型動画配信）でも安定した人気が続いており、2016年度はカンテレの動画配信がスタートして以来、最高の伸び率を記録することができました。

海外各国・地域への番組販売では、ドラマコンテンツが好調であることに加え、2016年度はバラエティー番組『潜入！ ウワサの大家族』のセールス、ドラマ『素敵な選TAXI』のリメーク権セールスなども実現、国外の皆さまにもカンテレの番組をさらに幅広くお楽しみいただいています。

そのほかビデオグラムの分野では『サイレーン 刑事×彼女×完全悪女』（2015年10月期放送）『ON 異常犯罪捜査官・藤堂比奈子』（2016年7月期放送）『メディカルチーム レディ・ダ・ヴィンチの診断』（2016年10月期放送）などのドラマを中心に高い人気が続き、またモバイル事業でも好評の競馬コンテンツをパワーアップ、さらにご満足いただけるソフトの開発に取り組むなど、地上波放送を超えたいくつものメディアを通じ、ますます多くの番組・コンテンツを皆さまにお届けしています。

『ボクの妻と結婚してください。』 ©2016映画「ボクの妻と結婚してください。」製作委員会

『素敵な選TAXI』 中国リメーク版ポスター

『サイレーン 刑事×彼女×完全悪女』 Blu-ray BOX

2016年度 受賞一覧

2016年度の受賞も多岐にわたるものとなりました。地元・大阪から国外まで広く題材を求めたカンテレ伝統のドラマ、ドキュメンタリーをはじめ、新技術の開発、次世代映像への取り組みなどが内外さまざまな場で評価を頂戴しました。

『大阪環状線 ひと駅ごとの愛物語』 第3回 大正駅「新しい海の出現」（2016年1月26日放送）

平成28年 日本民間放送連盟 連盟賞 番組部門 テレビドラマ番組 優秀賞

『大阪環状線 ひと駅ごとの愛物語』は大阪環状線の各駅とその界隈を背景として展開するドラマシリーズで、2016年1月～3月に最初の10話を、続いて2017年に「Part 2」を制作・放送しました。
大阪を題材に、大阪の制作者らが演出を担当、路地や盛り場といった風景を現実の視覚に近い形で再現するため4Kカメラを使用するなど、意欲的に取り組みました。
その中から、大正駅周辺を舞台に偶然出会ったある男女のひとときを描いた第3回「新しい海の出現」が受賞。「セットや衣装ごとに登場人物の心象を象徴する色を巧みに配した、印象的な作品」と評価いただきました。

ザ・ドキュメント『京の摺師～パリに渡った浮世絵』（2015年12月12日放送）

ABU賞 テレビドキュメンタリー部門 審査員賞

明治維新以降の混乱で日本から流出、欧米各地の美術館に埋蔵されている浮世絵版木の発掘に取り組む京都の木版画作家――フランス国立図書館で歌麿の大首絵を彫った版木を発見、年月をかけた交渉の末、ついにパリで歌麿版木を刷り始める作家の姿を4Kカメラで追った作品です。

※ABU（Asia-Pacific Broadcasting Union/アジア太平洋放送連合）はアジア太平洋地域の放送の発展に協力する放送機関の連合体で、テレビ7部門・ラジオ6部門それぞれの最優秀作品にABU賞が贈られます。

※ザ・ドキュメント『京の摺師～パリに渡った浮世絵』は2015年度「第23回 坂田記念ジャーナリズム賞 第2部門（国際交流・国際貢献報道）」を受賞しました。

ザ・ドキュメント『生きること～認知症の心に寄り添うバリテーション～』（2015年9月19日放送）

第36回「地方の時代」映像祭2016 放送局部門 選奨

認知症患者との意思疎通を図る手法「バリデーション」では、騒ぐ・徘徊するといった認知症の人の行動を全て「意味あるもの」と捉える。介護する側が患者と共に行動し、共感することで、そこには新たな人間関係が築かれ、尊厳を保った人生を患者が全うすることへとつながっていく。
言葉だけでは通じ合えない相手とのつながりを探していく介護の現場から、現代社会のコミュニケーションのありようを考えた作品です。
「地方の時代」映像祭では2015年度に続き、この作品で2年連続の入賞となりました。

『3人のヤマトナデシコ～ただ勝利のためでなく～』（2016年3月26日放送）

日本映画撮影監督協会 JSC賞（2016年度最優秀撮影賞）
アジアテレビ賞 最優秀スポーツ番組賞 ／4K徳島映画祭2016 4K映像賞

試合に勝つことだけではない「何か」を目指す、3人の女性アスリート――葛藤する空手道世界女王、走り続けるBMXの先駆者、文武両道の知性派サーファー、それぞれのひたむきな姿を追ったスポーツドキュメンタリー。
次世代映像技術「HDR」コンテンツとして制作、さまざまな4Kカメラを駆使した多彩な映像表現で、忠実な臨場感の再現に挑んだ作品です。JSC賞では関西からの出品作（撮影者）として初めての受賞となりました。

※HDR（High Dynamic Range）は映像のダイナミックレンジ＝輝度の幅を拡大し、これまで描写の難しかった明暗差・輝きなどを質感高く伝える、新しい技術です。

『僕のヤバイ妻』（2016年4月～6月放送）

第3回 アジア・レインボー・テレビ・アワード2016 現代ドラマ作品部門 最優秀賞・ドラマ脚本部門 最優秀賞

家庭生活の息苦しさに耐えられず、妻を殺そうと決意した夫。しかし帰宅すると、妻は何者かに誘拐されていた。やがて誘拐騒動は思いもよらぬ方向へと展開、浮かび上がってきたのは妻の恐ろしい正体だった。追い詰められる夫、妻の真の目的は何なのか――
火曜よるの全国ネットドラマ枠で放送、ぶつかりあう男と女を描いた心理サスペンスが国境を超えて評価を頂き、同賞を受賞しました。

※アジア・レインボー・テレビ・アワードは中国ラジオ映画テレビ連合会と香港テレビプロフェッショナル協会が2011年に設立、ドラマ、ドキュメンタリー、エンターテインメントなど28部門にそれぞれ最優秀賞が贈られます。

ザ・ドキュメント『兄と弟～満州 おもいでの河へ～』（2016年11月22日放送）

第24回 坂田記念ジャーナリズム賞 第2部門（国際交流・国際貢献報道）

太平洋戦争終結の前年、満蒙開拓団の一員として中国東北部（当時の満州国）に渡ったある一家。父は現地で徴兵され、残された家族は敗戦後、難民収容所へとたどり着く。幼かった兄弟はそこで生き別れとなる。弟は中国人に引き取られ、兄は戦争孤児として日本へ。
1987年に弟が中国残留孤児として帰国、兄弟は40年ぶりの再会を果たす。が、言葉や文化、背景の違いによる互いの溝は深かった。かつて暮らした満州の「おもいでの河」をもう一度探す旅に、兄は、弟を誘うことを決意する――
「擦れ違う兄弟の姿を克明に描き、視聴者の深い感動を呼んだ。ジャーナリズムの発展に貢献する優れた作品」と評価を頂きました。

ユニット交換型LEDマルチロケーションライト「エリオット」

平成28年 日本民間放送連盟 連盟賞 技術部門 優秀賞／日本照明家協会賞 テレビ部門 技術賞

放送業務用のLEDライトは光源となるLEDが本体に固定されていて、交換することができませんでした。そこで家庭用照明と同様にLEDを交換できる機材の開発に取り組み、この「エリオット」が完成しました。
これにより色温度を選択することが可能となり、演出上の目的に応じて被写体に当てる照明の色を幅広く選べるようになりました。
さらにエリオットではフォーカスやディマーの操作が可能、本体のみで約0.5㌔と軽量化するなど、これまでの放送業務用ライトになかった特性と、制作現場での使い勝手の良さを同時に実現することができました。

※共同開発：富士ライト商事㈱ ㈱エルム カラーキネティクス・ジャパン㈱

カンテレのメディアリテラシー推進活動

メディアとは、情報や娯楽といったメッセージを伝えることで、人と人を結びつける仕組みのこと。仕組みを組み立てたり、扱ったりするときの意図や行動次第では、メディアはとてつもなく大きな影響力を帯びることもあります。
現代に生きる限り、この影響力から逃れることは困難です。
どうすれば賢く付き合っていけるのか。
私たちにもできることを――と取り組み続けているのが、カンテレのメディアリテラシー推進活動です。

出前授業 2008年～

カンテレのさまざまな職場で働く現役社員が講師となり、エリア内各地の小・中・高校などに授業の「出前」をする活動です。
2007年発足の「心でつながるプロジェクト」※が実行に移した最初の活動のひとつで、これまでに80を超える学校・団体などで実施してきました。
「出前授業」の目的は、まず社員講師が携わる仕事について児童・生徒の皆さんにお伝えすることで、メディアリテラシーについての知識を身に付けていただくこと。
そして私たち社員もこの活動を通して、自らの仕事の意味を改めて問う機会としています。
メディアリテラシーとは、誰もが互いに情報の受け手・送り手として「学び合う」ことなのではないか、と私たちは考えています。 ※『心でつながるプロジェクト』はP.23参照

「カンテレ出前授業」が目指したいこと

10年近く活動を続ける中で、出前授業にお申込みいただく学校・団体のニーズも少しずつ変化しつつあることを実感しています。
そもそもの目的であるメディアリテラシー教育では、SNSをはじめネットメディアがますます深く、暮らしに浸透していく現実を踏まえる必要があります。
また若い世代が将来を考える材料としての「キャリア教育」の側面も、教育現場での重みを増しています。

私たちはそうした個別のニーズをまず伺い、その上で講師や内容について時間をかけ、ご一緒に決めていくいわばハンドメード方式、毎回がオリジナルの出前授業を続けています。
メディアの現場の知識を「出前」しながら、社会の「いま」と「これから」を生きていくすべを皆さまとともに学び合い、そして常に現在進行形で、その結果と成果の検証を繰り返していくべきと思っています。

2016年度実施の「カンテレ出前授業」

6/1 西宮市立甲陵中学校
講師：竹﨑由佳（アナウンス部）

講師は入社2年目の竹﨑アナウンサー。自らも毎日行っている発声法や呼吸法の実戦トレーニングで生徒全員がにぎやかに盛り上がった後、続いて「言葉を伝えたいとき、大切にしていること」などをテーマに、竹﨑アナの考えをお話しました。

6/13 関西大学総合情報学部
講師：近藤兵衛（制作部）

受講者は大学生の皆さん。詳しく理解していただけることを期待して、番組『R-1ぐらんぷり2016』を題材に、プロデューサー・総合演出の立場から、番組の狙い・スタッフ構成・予算管理などに至るまで、多岐にわたる内容をお話しました。 ※『カンテレ通信』（P.37参照）で放送

6/26 伊丹市女性・児童センター
講師：毛利八郎、山本悠美子（アナウンス部）

同市内の皆さんに、親子で受講していただきました。楽しいゲームや模擬インタビューを通じながら「上手に情報を伝えるために覚えておきたいこと」などについて、両アナウンサーが説明しました。

7/14 大阪府立光陽支援学校 大阪市立総合医療センター分教室
講師：関 純子、大橋雄介、服部優陽（アナウンス部）

入院生活を送る小学生・中学生の皆さんが、退院後も含めて人と仲良くやっていくには――がテーマでした。「自己紹介の仕方」では関アナの「良い例」と大橋アナの「悪い例」を比べて大きな笑いが。ほか「話の広げ方」など、ちょっと難しい内容も、皆さんに楽しく聞いていただきました。

10/5 茨木市立養精中学校
講師：高原礼子（制作部）

皆さんが自分の将来を考えるに当たり、テレビの現場での仕事についてお伝えする授業でした。講師は『にじいろジーン』の担当ディレクター。番組制作者を目指し始めた中学生時代から現在に至るまで、学んだこと、覚えておいてほしいことなどをお伝えしました。

11/9 大阪市立白鷺中学校
講師：高原礼子（制作部）

養精中学に続いて制作部・高原ディレクターが連投を立候補、講師を務めました。キャリア教育の素材として自らの経験や考えを皆さんにお伝えしたほか、1本の番組や1本のVTRができるまでにやらなければならないことなど、仕事の内容についても詳しく説明しました。

12/6 甲賀市立佐山小学校
講師：縄田丈典（報道センター）

講師は若手報道記者。「身の回りの新たなことを伝える」「隠された事実を伝え、権力を監視する」など、報道の役割についてかみ砕いて解説したほか、業務用のテレビカメラを使った模擬リポートを体験してみるなど、楽しみながら皆さんにニュースを理解してもらいました。

12/12 大阪市立真田山小学校
講師：田中大貴（報道センター）

大阪府警担当の記者が講師です。「取材とは何か」を体感してもらうために、まずは記者が児童の皆さんの中に入って突撃取材。続いて児童たちが「昨日の出来事」をテーマに、お互いを取材しました。平凡だけど幸せだった、皆の「昨日の出来事」――そんなことを大切にしよう、と授業を締めくくりました。

1/27 大阪市立大池中学校
講師：高橋亮光（報道センター）

2016年放送のドキュメンタリー『山奥ニート』を題材に、制作したディレクターが授業を行いました。取材対象となった「ニート」の人たちに共感できるか、できないかなど、番組についての意見を徹底的に出し合い、それを通じて、情報の伝え方・受け取り方にはさまざまな広がりがあることを伝えました。 ※『カンテレ通信』（P.37参照）で放送

3/14 宝塚市立山手台中学校
講師：片平裕之（事業部）

講義の希望が、舞台やライブなどさまざまなイベントを行う事業部に。ビジネスの側面など高度な内容も含む授業でしたが、熱心に聞いていただきました。後半は生徒の皆さん自身が「実現したいイベント」を企画、何かを作り出す過程や、そこで得られるものなどについて考えてもらいました。

3/31 「より良いメディアリテラシー教育に向けて ～活動総括・意見交換会～」

2015・2016年度に交流させていただいた各校の先生方、講師を務めたカンテレ社員、それにジャーナリストの下村健一さんが参加して「カンテレ出前授業」を総括する意見交換会を行いました。
私たちと同じくテレビ局の出身で、メディアリテラシーを詳しく研究され、大学などでも教鞭を執る下村さんには「行司役」をお願いし、教育の現場・メディアの現場で私たちが取り組むメディアリテラシーの課題と目標について共に考えました。

「メディアリテラシーとは、時代とともにメディアがどのように変わっても“情報に振り回されない人間”を作ること。そもそも“明るい話”なんですよ」と下村さん。
大事なのは、互いに「お任せ」にしないこと――「教育とメディアに携わるそれぞれが、知識とノウハウをこれまで以上に、積極的に提供し合う必要がある」と、意見交換会を終えて強く感じました。

「出前授業」のお申し込み：毎年3月からカンテレのホームページで受け付けを行っています。
※2017年度の募集は締め切らせていただきました。

映像制作「学びアイ」2009年～

エリア内の高校を中心に、放送部・放送研究会などの皆さんが取り組む映像制作を、カンテレ社員が講師となって支援する活動です。番組制作や技術部門の担当者、アナウンサーらが学校に伺い、あるいは生徒の皆さん・顧問の先生方にカンテレへお越しいただきます。
企画（何を伝えるのか）構成（伝えるために、どう表現するのか）などをテーマに皆さんとの「手作り」で活動を進め、出前授業と同様に、お互いがメディアリテラシーを「学び合う」ことを目標にしています。

映像制作「学びアイ」が目指したいこと

スマートフォンで気軽に撮った映像がネット上を飛び交います。高度な画質で隅々まで埋め尽くしたCGが制作され、VR（バーチャルリアリティー）もいよいよ広く現実のものとなろうとしています。わずか何年かの間に、映像の世界ではまたもや新たな変化が起きています。
「学びアイ」の活動を通じて、私たちはテレビ番組を制作し、放送するため積み上げてきた技術や知識をお伝えしています。
映像伝達の手法が更新されていく中で、変わることなく根底にあるのは「どうすれば伝わるのか」ということではないかと思います。
活動の場を共にする皆さんと一緒に見つめ続けたいのは、人に思いを、メッセージを伝えるために大切なのは何なのかということ――謙虚さを忘れずに、これからも取り組んでいきたく思っています。

2016年度実施の映像制作「学びアイ」

三重県立名張高校放送部

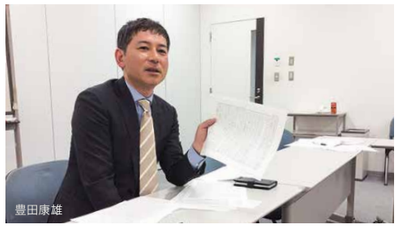
10/27 講師：真鍋俊永（報道センター）
3/23 講師：大窪秋弘（報道映像部）
3/28 講師：北山晃（株式会社TEFU2）、豊田康雄（アナウンス部）

大阪市立南住吉大空小学校の取り組みを1年間かけて取材、文化庁芸術祭賞などを受賞し、映画化もされたドキュメンタリー『みんなの学校』の担当スタッフらが講師となり、名張高校の皆さんが取り組んでいる映像作品へのアドバイスを中心に実施しました。
作品は名張高校が創立100年を迎えるのを機に、校長室に掲げられた1枚の古い絵から学校や地域の過去をひもといていこうという、歴史ドキュメンタリーです。
絵を手掛かりに、誰に取材し、作品をどうやって組み立てていくのか――。
『みんなの学校』のディレクター、カメラマン、編集マン、そしてナレーションを務めた豊田アナウンサーがそれぞれ制作中の作品を見せてもらい、各自の立場から「こうすればきっとよくなる！」と思うことを助言し、話し合いました。

真鍋俊永

大窪秋弘

北山晃


豊田康雄

放送芸術学院専門学校

6/1 講師：塩川恵造（CSR推進部）

卒業後は映像や音楽、出版などの業界を目指す学生の皆さんを対象に、ドキュメンタリー番組の取材などをテーマに講義を行いました。
講義では「自分のオリジナルな仕事をしたいなら、まずは人との関係性を根気よく築くこと」「ドキュメンタリーの場合なら、目的に合う取材対象者は必ず自分の足で探しています」といった内容を、テレビの仕事での実例を交えながらお伝えしました。
そのほか仕事の途中に発生するリスクへの対処法なども含め、今後メディアの世界で活躍する皆さんへの有益なヒントとなるよう、内容を構成しました。

映像制作支援「学びアイ」のお申し込み：毎年3月からカンテレのホームページで受け付けを行っています。
2017年度分を募集中です（2017年7月現在）。

オープンスクール@カンテレ 2010年～

毎年夏休み、メディアリテラシーをテーマに、小学生と保護者の方々を招いて開催しているイベントです。8月21日に開催した「オープンスクール@カンテレ2016」で7回目となりました。
会場はカンテレ本社の多目的スタジオ・なんでもアリーナと、公開広場のアトリウム。
なんでもアリーナではカンテレ社員らによる公開授業を実施、アトリウムではさまざまな体験型展示を行っています。
公開授業ではテレビの仕事についての講義でメディアリテラシーを学んでいただくとともに、ステージ・客席での小学生の皆さん自らの体験にも重点を置き、知識をわかりやすくお伝えするよう取り組んでいます。

「オープンスクール@カンテレ」が目指したいこと

テレビなどメディアを介して流通する情報の読み解き方・伝え方を知ること＝「メディアリテラシー」を、公開授業という形で皆さまと共に学ぶ場が「オープンスクール@カンテレ」です。
デバイスの面でもソフト（中味）の面でも、人と人のコミュニケーション経路であるメディアは、日々刻々の勢いで変化しています。
目を輝かせ授業に聴き入ってくれる小学生の皆さんには将来、想像もつかない新しいメディアとの出会いが待っているに違いありません。
変わっていくメディア環境について、私たちカンテレ社員が最新の知識やノウハウをできる限り動員しながら、どれだけのことをお伝えし、皆さまと共有することができているのか。このハードルを越えることが「オープンスクール」の毎年の課題です。
次回「オープンスクール@カンテレ2017」でも、テレビ・メディアについての最新の知見をお持ち帰りいただけるよう、内容を構成してまいります。
未来の社会をこれから生きる皆さんに、毎回いままでなかった「オープンスクール」をお届けしていくこと――それが私たちの目標です。

オープンスクール＠カンテレ2016（8月21日開催） 公開授業の内容

1時限目 「アナウンサーになってみよう！」

講師：坂元龍斗アナウンサー、高橋真理恵アナウンサー

これまで「オープンスクール」に参加した皆さんのアンケートでも一番リクエストの多かった、アナウンサーによる公開授業。会場にも「将来アナウンサーになりたい」という子どもたちが何人もいました。
授業はプロのアナウンサーも毎日行っている滑舌（かつぜつ）の練習でスタート。続いて夕方のニュースでフィールドキャスターを務める坂元アナが1週間の多忙なスケジュールを紹介したあと、ステージに「模擬生中継」のシーンを作り、小学生の皆さんにも中継のキャスターに挑戦してもらいました。「アナウンサーを目指したい」という皆さんのリポートは見事で、壇上のアナウンサーたちもびっくりの仕事ぶりでした。

2時限目 「気象予報士になってみよう！」

講師：片平敦さん（気象予報士）、小林正寿さん（気象予報士）

テレビが伝えるライフラインのひとつ、気象情報の授業です。まずは気象予報士やアナウンサーと背景の天気図などを合成するテレビのマジック「クロマキー」をステージに再現して解説。「緑色の服を着ている人は、画面では透明人間になってしまう」というクロマキーの特性を使った遊びも入れ、楽しく仕組みを学びました。
続いてはメインテーマの気象予報士体験。「天気図を読む3つのコツ」の伝授のあと、先ほどのクロマキーで小学生たちがかわるがわる挑戦しました。
最後は天気の変わりやすいこの季節、気をつけたい情報を盛り込んだ「防災クイズ」を3題。カンテレのニュースでもおなじみの片平気象予報士が「天気の情報は、命を守るものなんだよ」と締めくくって終わりました。

3時限目 「テレビの最新技術に迫ってみよう！」

講師：栗山和久（技術推進部）、日浅宏一（株式会社ウエストワン）、
片平敦さん（気象予報士）

日本での放送が始まって60年あまり、テレビは新しい技術の開発とともに、これからもどんどん変わっていきます。3時限目はそんな最新技術3つを学ぶ授業です。
トップバッターは空からの撮影にいま大活躍、無人機のドローンが登場。想像以上に大きな音を立ててステージに飛来した実物のドローンに、子どもたちも保護者の皆さんもちょっと興奮した様子でした。
続いてはテレビ電波のすきまを使って、防災などのためにカンテレが開発・応用に取り組むミニミニ放送局「エリア放送」を解説。
そして最後は「クロマキーカット割りシステム」。2時限目に登場した「クロマキー」を複数のカメラを使ってさらに見やすくしたもので、これもカンテレ技術陣が開発した新技術です。ここでは小学生の皆さんがカメラマンや映像を切り替えるスイッチャーに挑戦、技術スタッフらのコーチを受けながら、システムの面白い効果を体験しました。

なお総合司会は石巻ゆうすけ・関純子アナウンサーが務め、ほか同志社女子大学 情報メディア学科教授の影山貴彦さん、劇作家・演出家のわかぎゑふさん、漫才コンビのスマイルも出演、授業の模様は自己検証番組『カンテレ通信』で放送しました。※『カンテレ通信』はP.37参照

※「オープンスクール＠カンテレ」は阪急阪神ホールディングス㈱の体験プログラム「阪急阪神 ゆめ・まちチャレンジ隊」にご協力いただいています。

社内組織「心でつながるプロジェクト」について

「心でつながるプロジェクト」（略称：心PJ）は管理部門、流通部門、制作現場と全社を横断、さまざまな職場から社員が参加し、活動しているプロジェクトチームです。
カンテレのメディアリテラシー推進活動、CSR推進活動はこの「心PJ」を通じて社内で情報共有され、また活動を具体的に推進していく際には、社員らが協力し合う起点ともなっています。
プロジェクトのメンバーは原則2年のサイクルで交代し、毎年ほぼ半数が新しい顔ぶれでスタートを繰り返します。

「心PJ」は2007年、カンテレが『発掘！あるある大事典Ⅱ』の問題に直面したことを契機に発足しました。そのとき私たちは、問題が投げかけた重い教訓から何を学び、そして視聴者の皆さまともう一度「心でつながる」にはどう行動していけばいいのかを、プロジェクトの活動を通して考え始めたのでした。
カンテレ社内で活動している各種のプロジェクトのうちでも、この「心PJ」は最も長期間継続しています。
それは2007年の発足時に共有した、視聴者の皆さまと「心でつながる」ことへの決意をカンテレが変わることなく維持するためであり、その「つながり」を実際の形にするメディアリテラシー・CSRの活動においていま、どのような取り組みが必要なのかを、私たちが共に、常に考え続けていくためなのです。

カンテレのCSR推進活動

番組をはじめ映画、エンターテインメントなど良質なコンテンツを毎日、皆さまにお届けすることがカンテレの本業です。
それに携わる社員たちが「自分たちにできることを」と、将来を担う若い世代に主眼を置いて取り組んでいるのが、メディアリテラシー推進活動。
カンテレではこのほかにも、放送局としての特徴を生かしながら、多方面でCSR推進活動を進めています。
目指したいのは「カンテレらしい」と言っていただけるCSR――2016年度に行った活動を「人権への取り組み」「地域コミュニティーへの参画」「環境への取り組み」3つの分野に分け、ご報告します。

人権への取り組み

2016年4月の熊本地震、いまだ傷の癒えない東日本大震災 ── それぞれの被災地支援への独自の取り組みに40年以上続くFNSチャリティキャンペーンを加え、カンテレでは2016年度、3つの募金活動を実施しました。
1980年代以来となる報道の児童虐待防止キャンペーン、子どもの虐待ホットラインへの支援などを基軸に、子どもたちの福祉にも力を注ぎ続けています。
このほか障害者・健常者が協力し合う表現活動を応援する「ソーシャル・パフォーマンス」シリーズの開催など、放送局として忘れてはならない人権へのまなざしを、カンテレはさまざまな方法で形にしています。

募金活動

2016年度は「カンテレ災害救援募金」（熊本地震被災地支援）「関西テレビ 東日本大震災救援募金」「FNSチャリティキャンペーン」3つの募金活動に取り組み、番組・ホームページでのお知らせや、イベントなど募金促進のさまざまな活動を通じて、国内外各地の支援を行いました。

1. カンテレ災害救援募金（熊本地震被災地支援）

平成28年熊本地震・本震2日後の4月18日から9月30日まで実施、夕方のニュース番組『みんなのニュース ワンダー』など各方面で呼びかけを行い、皆さまから合計2,493,767円もの温かいご支援をお寄せいただきました。募金は日本赤十字社を通じ、全額を熊本地震被災地の方々へお送りいたしました。

2. 関西テレビ 東日本大震災救援募金

2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災地を支援するため、カンテレでは初年度・2011年度はFNS系列加盟社として「FNSチャリティキャンペーン」での募金を行いました。
翌2012年度からは同被災地支援の募金を独自に開始し、現在「関西テレビ 東日本大震災救援募金」として継続、通算で7年目となりました。お寄せいただいた募金は日本赤十字社を経て、全額を東日本大震災被災地の皆さまにお届けしています。
2011年度から2016年度まで、6年間の募金額は合計65,429,849円に上ります。長い間にわたる皆さまの温かいご協力に、心より感謝申し上げます。

カンテレ アナウンサー朗読会2016「いのちのまつり」（9月4日開催）

言葉で伝えるプロとしてのカンテレアナウンサーたちが、文学作品などの「朗読」という分野に挑戦する催しで、2002年の第1回以来15年にわたって続けています。大きな自然災害などが相次いだ2016年度はサブタイトルを「いのちのまつり」とし、人と人との触れ合いや温かさを、4つの作品の朗読を通じてお伝えしました。
「アナウンサー朗読会」では毎年アナウンサーから来場者の皆さまに募金の呼びかけを行っており、今回は熊本地震・東日本大震災2つの被災地支援にご協力いただきました。

3. FNSチャリティキャンペーン

「世界の子どもたちの笑顔のために」をテーマに、カンテレ・フジテレビ系列28局がユニセフ（国連児童基金）とともに1974年から取り組んでいるチャリティー活動です。
発展途上国、大規模自然災害の被災国に暮らす子どもたちは、貧困・虐待・高い乳幼児死亡率・劣悪な教育環境など、さまざまな問題に直面しています。
スタート以来44年目を迎えたこのキャンペーンでは、番組などを通じて視聴者の皆さまへのお知らせを続けるとともに、カンテレでもチャリティーイベントほか独自の取り組みを行い、エリア・地域の皆さまから温かいご協力を頂いています。
2016年度の支援対象国は西アフリカのトーゴ共和国。2017年度は南米・ボリビア多民族国です。

「FNSチャリティキャンペーン」過去5年間の実績

	支援対象国	FNS 28局 募金額 (円)	関西テレビ 募金額 (円)
2012年度	チャド共和国	53,185,199	3,530,601
2013年度	ネパール連邦民主共和国	47,972,343	4,123,581
2014年度	フィリピン共和国	54,295,318	3,986,008
2015年度	マダガスカル共和国	54,587,213	3,740,553
2016年度	トーゴ共和国	49,083,150	4,168,003

FNSチャリティキャンペーン 現地取材報告会
「山中章子アナウンサーが見たトーゴ共和国～赤土の大地を生きぬく子どもたち～」
（2月5日開催）

西日本最大級の国際協力のお祭り「ワン・ワールド・フェスティバル※」の一環として開催、FNS（フジネットワークシステム）を代表して支援対象国・トーゴ共和国に取材したフジテレビの山中章子アナウンサーが現地の模様を報告しました。
厳しい生活環境の中、都市や地方に生きる子どもたちの現状を伝えるドキュメント映像の紹介や、ゲスト出演いただいたトーゴ大使館の方とのお話などを通して、この国の人たちが抱えている課題について詳しくお伝えしました。
イベントでは募金のほか楽しい民芸品などの即売も行い、売り上げの一部をトーゴ共和国へのチャリティーとさせていただきました。 ※「ワン・ワールド・フェスティバル」はP.35参照

子どもたちのために

カンテレでは1980年代に開始した「児童虐待防止キャンペーン」をはじめ、子どもの福祉を促進する活動に長く取り組んでいます。家族や社会の在り方が次第に変わっていく中で、私たちはこの課題の「いま」を常に見つめ、模索しながら行動を続けています。

児童虐待防止 報道キャンペーンと（特非）児童虐待防止協会「子どもの虐待ホットライン」への支援

「児童虐待」という言葉がまだあまり知られていなかった1980年代、カンテレは報道キャンペーンとしてこの問題への取り組みをスタートさせました。さまざまな角度から取材を行い、ニュースやドキュメンタリー番組として放送を続け、さらにこのキャンペーンが1990年、子どもの虐待の相談救助活動を行う「児童虐待防止協会」の設立へとつながりました。
「児童虐待防止協会」は電話による相談窓口を設けた日本初の民間団体で、窓口を「子どもの虐待ホットライン」と呼び、活動を続けています。ここでは虐待に悩む母親や子どもからのSOSを受け付け、虐待の防止と早期発見を目的とする電話相談の件数は2016度末で累計5万8751件に達しました。
協会は2002年に特定非営利活動法人（NPO法人）の認証を受け、市民グループ、学生といった方々への講演会、啓発活動や親たちのためのグループケアと、より多様な活動を行っています。カンテレも協会の発足以来30年近くにわたり「子どもの虐待ホットライン」のお知らせを毎日のニュースで放送するなど、活動の支援を続けています。

「日本子ども虐待防止学会 第22回学術集会おおさか大会」（11月25日・26日 大阪市内）
「新たな支援の創造」をテーマに国際的な視野も盛り込んで開催された同大会に
カンテレも参加、児童虐待防止キャンペーンをはじめとする取り組みを紹介しました。

児童虐待を取材したドキュメンタリー番組

ニュースでの報道と並行して、カンテレではこの問題についてのドキュメンタリーも数多く制作しています。その内容は、虐待の実態を取材した作品から海外でのケアを紹介するルポまで、子どもたちを助ける視点にとどまらず、親の苦悩、家族を支援する専門家らの試行錯誤に切り込むものと、多岐にわたっています。
継続的なこの取り組みは複数の角度から問題に迫り、やがて全体像を描くことへとつながっていきました。そこで提起された課題は制度整備が進んだいまも通用するものを多分に含み、専門家にも強い示唆を与えるものとなっています。

ドキュメンタリー番組　これまでの放送から

『密室の親子 ～児童虐待を追う～』（1988年3月19日放送）
『密室の親子Ⅱ ～児童虐待を追う～』（1990年3月31日放送）
『週末里親 ～ずっとそばにいて』（1994年11月29日放送）
『くらやみにまけないで 虐待の記憶との闘い』（2005年11月3日放送）
『虐待の記憶との闘い 心の傷を癒す「支援」』（2006年3月30日放送）
『手さぐり ～児童虐待の真実を見つめた18年～』（2008年4月28日 放送）など

第2回 大阪市里親会シンポジウム（11月27日開催）

サブタイトルを「親と暮らせない子どもたちのいま」とし、大阪市里親会・大阪市との共催で実施しました。このシンポジウムをカンテレで行ったのは、2015年度に続いて2回目です。
今回は実際に里親として子どもの福祉に取り組む専門家、課題に携わる行政の担当者のほか、大学の研究者も登壇し「施設養護」から「家庭養護」へと方向性の転換を掲げた国の施策、そのもとでの社会の現状などを解説、ワークショップによる来場者との議論も交えながら認識を深めました。
会場からは「自分も里親になることを考えたい」といった反響も頂くなど、手応えの感じられる場とすることができました。シンポジウムの模様は自己検証番組『カンテレ通信』で放送しました。

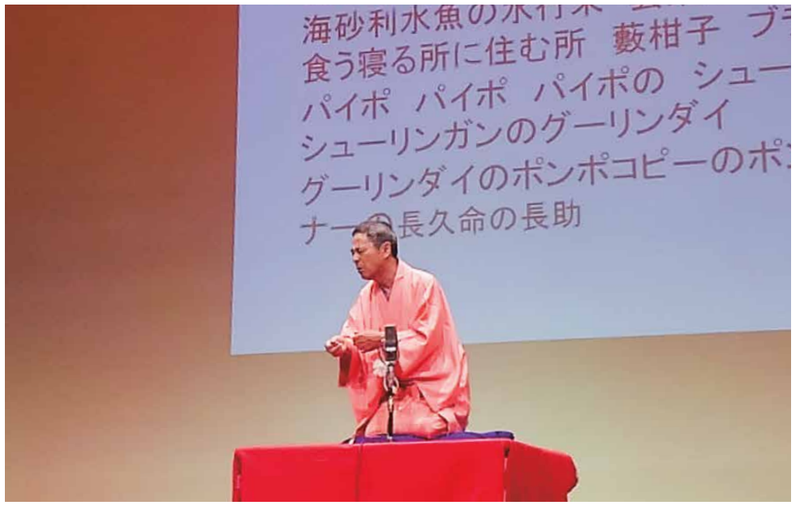
※『カンテレ通信』はP.37参照

「ソーシャル・パフォーマンス」シリーズ

障害のある人と健常者が協力し合って、話芸・音楽・ダンスなどのジャンルでこれまでになかった表現を生み出し、訓練の成果を披露する「ソーシャル・パフォーマンス」シリーズ。2014年度に開始、障害の「ある・なし」の壁をパフォーマンスで乗り越えようというライブステージを、2016年度も実施しました。

第3回 手話寄席（8月28日開催）

「しじみ売り」「ねずみ穴」など人情噺を語れば天下一品、落語家の桂福団治師匠。故・3代目桂春団治師に入門して57年、上方落語界・重鎮のお一人です。
福団治師匠のもう一つの顔、それは「手話落語家」です。30代の時に声帯ポリープを患い、一時的に声が出なくなったことがきっかけとなり「手話で演じる落語」を考案、勉強と研究を経て、手話落語を確立されたのです。手話落語のお弟子さんたちはその後どんどん増えていき、現在は7人。「桂」ではなく「宇宙亭一門」を名乗るこちらの皆さんは、師匠のもと、日々厳しく、いえ楽しく稽古に励まれています。
声ではなく手話のしぐさで伝える手話落語――その面白さは、文字ではなかなか分からないかもしれません。ところがじつは「しかけ」があって、会場は毎回爆笑の渦なのです。手話落語の秘密、あなたもお知りになりたいと思いませんか。



Happyカムカム！ KICK OFF 2020（10月1日開催）

ロックやサルサの音楽ライブ、工芸やリズム遊びのワークショップ――ジャンルの制限を取り払い、障害のある人と健常者が一緒に集まるイベント「Happyカムカム」を2015年度に続いて開催しました。今回は2020年の東京五輪に続いて開催されるパラリンピックを前に、障害者と健常者が共に進むこれからを展望するミニシンポジウムも併催しました。
なんでもアリーナのライブには5組のバンドが出演、いずれも障害者・健常者の混成チームです。各バンドともオリジナリティーあふれる演奏を披露、このチームだからこそ出せる音があることを教えてくれました。ほか「上手も下手も関係なし」の織物として人気の「さをり織り」ファッションショーなども加わり、まさに色とりどり、にぎやかな一日となりました。

「人権への取り組み」において目指したいこと

誰もが明日への希望を失わず、生きていくことのできる社会。その実現に向け貢献を続けることは、放送局の最も大きな責務のひとつです。
私たちは番組の放送をはじめとするさまざまな経路を通じて、克服すべき問題を皆さまにお伝えし、それらを乗り越えるための方法について提言を行ってきました。
人の世が続く限り、これにゴールはありません。「人権」をCSRのテーマに掲げ続けるのなら、カンテレにできることはまだまだあるはずです。もっと新しい取り組みを、今後もさらに増やしていければと思っています。

地域コミュニティーへの参画
環境への取り組み

カンテレの本社社屋は大阪市北区扇町にあります。すぐ前を南北に走るのが天神橋筋商店街。江戸時代初期に発祥し、1丁目から6丁目までの総延長は約2.6キロ、日本一長い商店街といわれています。にぎやかで温かみのあるこの街で、カンテレも地域のコミュニティーづくりに貢献したいと考えています。
近隣の皆さまに気軽にお越しいただける無料のCSRイベントを積極的に開催、その他さまざまな街の行事にも参加させていただいているほか、地域社会の一員として、環境問題への取り組みも全社で進めています。

天満天神阿波おどり2016（8月21日）　上：第17回 天満音楽祭（10月2日）　下：第7回 中崎町キャンドルナイト（2月11日）

みんなが元気になる音楽会（9月19日開催）

散歩がてら聴きにきていただけるクラシックコンサートを――と、西宮市の「きらきら母交響楽団」を招いて開催しました。楽団の別名は「子連れオーケストラ」。楽器の心得はあるけれど、子育てで演奏は思うに任せない、けれどやっぱり音楽とは離れたくない――というお母さんたちが集まり、2014年に結成されました。
幼い子どもたちを連れ、おんぶしたままで演奏するスタイルは実にユニーク、そして音楽は温かです。
この日奏でた曲目はオッフェンバックの「天国と地獄」やブラームスの「ハンガリー舞曲」など、聴けば誰でも「あっ」と思い出すポピュラーなラインナップ、そして童話調の語りが入って親子で楽しめるプロコフィエフの「ピーターと狼」など。カンテレ・なんでもアリーナは客席も子どもたちでいっぱいとなり、みんなで和やかなひとときを過ごしました。
音楽会の模様は自己検証番組『カンテレ通信』で放送しました。 ※『カンテレ通信』はP.37参照

第24回 ワン・ワールド・フェスティバル（2月4日・5日開催）

150を超える団体が参加、音楽・ダンスのステージや講演会、ブース出展などで互いの理解を深めようという「西日本最大級の国際協力のお祭り」を2日間にわたって開催しました。会場として本社社屋のあるカンテレ扇町スクエア（なんでもアリーナ・アトリウム・メビック扇町）を広く開放、隣接する大阪市北区民センターでもさまざまな催しが行われ、近隣を中心に約2万5千人もの来場者にお越しいただきました。
その中でカンテレでは、市民の視点で撮影した動画作品を公募・上映する「ソーシャル映像祭@カンテレ」と、FNSチャリティキャンペーン「山中章子アナウンサーが見たトーゴ共和国～赤土の大地を生きぬく子どもたち～」※2つのイベントを主催、なんでもアリーナを会場に実施しました。
カンテレが「ワン・ワールド・フェスティバル」の会場となるのは3回目。来場者への特典企画など、お隣の天神橋筋商店街にも多方面でご協力いただき、一帯が大いににぎわう2日間となりました。

※FNSチャリティキャンペーン「山中章子アナウンサーが見たトーゴ共和国～赤土の大地を生きぬく子どもたち～」はP.29参照

――映像の力でいい社会を――　ソーシャル映像祭@カンテレ（2月4日開催）

「ワン・ワールド・フェスティバル」の初日、なんでもアリーナを会場に実施しました。国際交流をはじめ地域活性化、障害者の支援、町作りなど「暮らしの中での社会への取り組み」を描いた動画作品を募集・上映し、制作者による報告と意見交換を通して交流と互いの理解を深め合おう――と開催した、初めての試みです。
カンテレ放送エリアのほか東京など各地からご応募を頂き、集まった作品は43本。大学生、高校生や専門学校生から、NPOなどで身の周りの課題に取り組んでいる皆さんまで、文字通り老若男女、幅広くご参加いただきました。
「身近な課題を撮影した動画を」と呼びかけたイベントでしたが、海外は途上国への支援や交流、国内では地域の過疎、高齢化、災害への備え、自殺の防止と、真摯にテーマに向き合った作品の上映となり、参加者、主催者共に想像を超えた有意義な時間をもつことができました。
映像祭の模様は自己検証番組『カンテレ通信』で放送しました。 ※『カンテレ通信』はP.37参照

廃棄ビデオテープのリサイクル・アート化活動（2013年～）

カンテレでは社屋への省電力設備導入、番組を収録するスタジオ・各種の業務を行う事務フロアのLED化、社内で使用する水の10%を賄う雨水利用など、さまざまな方法で環境対策を進めていますが、放送局で可能な活動のひとつとして挙げることのできるのが「廃棄ビデオテープ」のリサイクルです。
番組の収録やニュース取材の映像を記録する媒体として、いまはディスク、メモリーカードなどの導入が進められていますが、並行して従来のビデオテープも使われています。何度か使用すれば廃棄せざるを得ないビデオテープの数は年間約1万本に上り、その処理に伴う環境負荷を低減するために取り組んでいるのが、この活動です。
廃棄処理するビデオテープは社内で消磁（データを消去すること）したのち、京都府亀岡市にある障害者就労施設に運ばれ、通所者の人たちにより部品ごとに分解・分別、一部がリサイクルされます。
環境への対策、障害者の仕事の創出などが達成されることに加え、テープやテープを巻き取るリールは一部が現代アート作家の手でリユースアートに生まれ変わり、その指導のもと、子どもたちのための「廃棄テープアート」ワークショップを開催するなど、活動を通じて新たな価値が生まれています。

「地域コミュニティーへの参画・環境への取り組み」において目指したいこと

エリアから全国、海外へとコンテンツを発信し続けるカンテレは、関西・大阪の放送局であることを何よりも大切にすべきと考えています。私たちが長年受け継ぎ、自らのものとしてきたこの地の風土や文化は、エリアの皆さまはもちろんのこと、ほかの地域の方々も必ず共感し、好きになってもらえるものと確信するからです。
カンテレCSRの業務では、時間と空間を共にする皆さまとの「顔の見える関係性」を特に重要なものと捉えています。それは、文化などを含めた地元の空気を、皆さまと私たちが直接やりとりできる機会だからにほかなりません。
地域環境改善への取り組みと同時に、コミュニティーへの参加を真摯に果たしていくことは、ここで仕事を続ける放送局であるカンテレにとり、決して欠くことのできないものなのです。

自己検証番組『カンテレ通信』

カンテレが制作する番組を自ら検証・批評し、皆さまによりよい放送をお届けできるよう取り組んでいる自己検証番組です。放送は原則毎月第3・第4日曜、あさ6時30分から7時までです。
カンテレでは個別の番組について外部有識者に審議いただく「番組審議会」と、番組や放送全般についてカンテレに対し広く論評・注意喚起・提言を行う「オンブズ・カンテレ委員会」という2つの第三者会議を定期的に開催しています。
『カンテレ通信』はこれらの委員会からの報告のほか、視聴者の皆さまからお寄せいただくご意見に一つずつ回答していく「ご意見ピックアップ」のコーナーや、カンテレの仕事や取り組みを紹介し、テレビやメディアなどについての理解を深めて頂こうという「カンテレEYE」「CSRファイル」コーナーで構成、放送しています。
番組には毎回のテーマに合わせ、プロデューサー・ディレクター・記者など制作現場の担当者をはじめ、さまざまな部署で業務に携わるカンテレ社員らが出演、それぞれの役割を取材したVTRも交えながら解説・報告を行います。
カンテレの番組やコンテンツを、視聴者の皆さまにより信頼され、安心してお楽しみいただけるものとしていくこと。そしてカンテレを、皆さまにとってさらに身近な放送局にしていくこと。これが自己検証番組『カンテレ通信』の目標です。

8/カンテレ

CSR REPORT 2017 **関西テレビ放送 2016年度CSR報告書**

編集・発行：関西テレビ放送株式会社 CSR推進局 〒530-8408 大阪市北区扇町2-1-7 ☎06-6314-8888（代表）
対象期間：2016年4月1日～2017年3月31日 このリポートはホームページでも開示しています。www.ktv.jp/csr

2017年7月発行